71
252

023287-000-6

71-252

北海南門之鎖論　一名，室蘭案内

綱島　儀太郎／著

M27

ADC-0161

71-252

北海南門必鎖鑰 全

綱島儀太郎著

一名室蘭案内

自序

余、去冬十二月帝京神田の客舍を出で、行李一携飄然として仙台に入り、居ること殆んど六旬、病を養ふて更に北海道に向ふ、雪花紛々又累々、滿目の風光轉た蕭條たるものあり、正に之れ本年一月なり、纜を青森港に解き、夜を徹して進む、進むこと十數時、漸く室蘭港に入る、余、初めて北海道の風色に接し、而して其山水の壯嚴雄偉なるに驚嘆し、

たりき。

夫れ、北海道は面積六千九百里之を帝國の全土に比せんか、其四分一を有し殆んと四國九州を併せて、猶二倍するものあり、而して山には則ち、鑛属良材、海には則ち、魚類介藻、悉く産出せざるはなし、加之ず、沃野曠濶、草木暢茂、誠に洵に一攫千金を致すに足る、而して是れが拓殖の效果を顧みれば、眞に寂寞として忸怩たらしむるものあり。

試みに室蘭郊外の山野を跋渉して、緑樹翁然たるの所に行かんか、葡萄亂熟して徒らに羆熊の食ふに任せ、老杉古松空しく朽枯す、嗚呼皇天の吾人に賦與する豈徒爾ならんや。

抑も室蘭は北海道南門の鎖鑰にして、炭鑛鐵道の起點たり、然らば則ち知るべきなり、室蘭の前途亦多忙なるを、況んや本年六月を以て特別輸出港の許可ありたるに於て

をや。

此頃内地の諸友、頻りに書を寄せて、室蘭の一般を問ふ、余其煩に耐へず、依て概略を記し、之を印刷に附し、友人の需に應じ、併せて室蘭を天下に紹介せんと欲す、微言以て序と爲す。

明治二十七年七月　鳳巣山下綠蔭深處に於て

著者識す

北海南門之鎖鑰

亡友戸田龜鶴君は甲州東山梨郡西保村戸田圓平氏の實弟なり、幼より東京に遊び、慶應義塾、東京英語學校等に學ぶ、人となり多感多情、甚だ物に熱中す、嘗て「基督教青年紙」上論文を掲げて大に世人の激賞を買へり、去冬十二月余東都を辭して北海道に向はんとするや、在京の知友爲めに集つて送別會を催せらる、龜鶴君演説して曰く「君を知るものは僕、僕を知るものは君、君今去る豈敢て一言なきを得んや」と述べ去り述べ來つて氣昂り情迫り、殆んど酩酊せるもの、如し、以て如何に君、僕の知己たりしかを知るべし、而して余仙臺に至る、氣候の激變に遭遇し、端なく病魔の襲ふ所となる、病床にあること殆んど三週間、書して君に報す、依つて直に書面を送くれり、須臾にして病愈へ、更に北海道に入る正に之れ一月三十日也。

二月十七日東京青年會書記大沼健次郎氏端書を余に

寄せて曰く戸田君十五日午前七時大學病院第一醫院に瞑すと、嗚呼眞乎夢乎余猶惚として其容を見るが如し、再讀再思、果して眞也、余是に於てか覺ねす、熱涙の滴滴たるものあり嘻如何せん、顧みれば、君と將來約すること誠に一にして足らす、今にして之を思へば夢魂飛んで神田の寓居に落つるものあるを覺ゆ、聊か君を紀念せん爲め左に手書を載せて緒言に代ふ矣

明治廿七年七月　著者記す

唯今夕飯の際此書簡を領せり先日より風邪の由是より尙は北海に向はんとする身、益々健康を祈る決して冷氣に犯さるゝこと勿れ若し夫れ四圍寂寥を感せばヘンリー、マルチンを想起せよ北海何かあらん兄の勇氣稜々たるは生の安心所以得眠也、生の病氣も近日全

愉し足痛も無之先づ安心也兎も角養生致し長く青年の元氣を保ちたき者也生等の如き感情强き者は甚だ古來早衰の恐れあり今より元氣保存を考ふること緊要也不然ば大業難成、押川と談話を試み候也若し然れば其談話及び押川は奈何なる人物なるや承り度候兄四國に生れ今度足を東北地方に運ぶ誠に幸ひなり古來わざ〳〵も參りたり就ては東北地方殊に仙臺に就てい奈何なる感を起せしや素より滊車中のことなれば委曲不可考唯其大体地勢風土人情等の特性を觀察せしならば敢叩高見候、北海道に入らば鷲の如き眼を

以て觀察可然候北海道は內地の浮浪者相集り風俗甚だ腐敗せるを聞及べり然れども其山川は實にサプライムにして內地の山川と甚だ趣を異にし殊に人烟稀少、萬方寂々たる處一層の壯觀と信ず爾來跋涉の士多しと雖と多くは皆政治兵事商業的の觀察にして毫も詩歌的の觀察をなせし者あらず蘇國の風光結美結佳、而して之を天下に紹介したるはスコットなり兄先づ此積りして北海の山川を跋涉すべし日本の地圖は持てバよし持たずんば仙臺にても函館にても買ひ求め暫くも坐右を離す不可、東京には親友戸田と云ふやつ

が居れば毫も不可有南顧之憂萬事安心して可なり奈何なることありとも落心沮喪すること勿れ他日の大望を思へば現時の苦痛は何でもなし餘り清める水には魚不住田舍のことなれば馬鹿と見ても遠ざくること勿れ忙まぜして教ゆべきのみ近日藤田東湖の詩鈔を讀む彼れは可驚巨人なり、昨夜また荻生徂徠を讀む山路君の健腕驚入候描盡大怪物無餘蘊東都無別條國會はこた〳〵火災なし歳末寂々幸ひに自愛せよ書簡絶ゆること勿れ別後益々愛情の濃かなるを知る

明治廿六年十二月廿一日夕ラッパの聲聞もる時

燒芋を食ふ錢なしと雖も書簡は端書にても何でもめた可往來是共に不可忘者也」

是れ實に去冬十二月君が送りし處のもの讀み終つて閉目靜思すれば暗魂の坐ろに飛動するを覺ゆ。

戸田龜鶴同

北海南門之鎖鑰目次

港灣及市街全圖

第一章　總論　一丁

第一課　位置

第二課　地勢

第三課　市街

第四課　氣候

第五課　人情風俗

第二章　戸數及人口　八丁

第三章　町村名　九丁
第四章　各國移住者統計　九丁
第五章　郡役所　十一丁
第六章　警察署　十二丁
第七章　地理課　十三丁
第八章　郵便局　十三丁
第九章　電信局　十四丁
第十章　銀行　十四丁
第十一章　稅關　十四丁

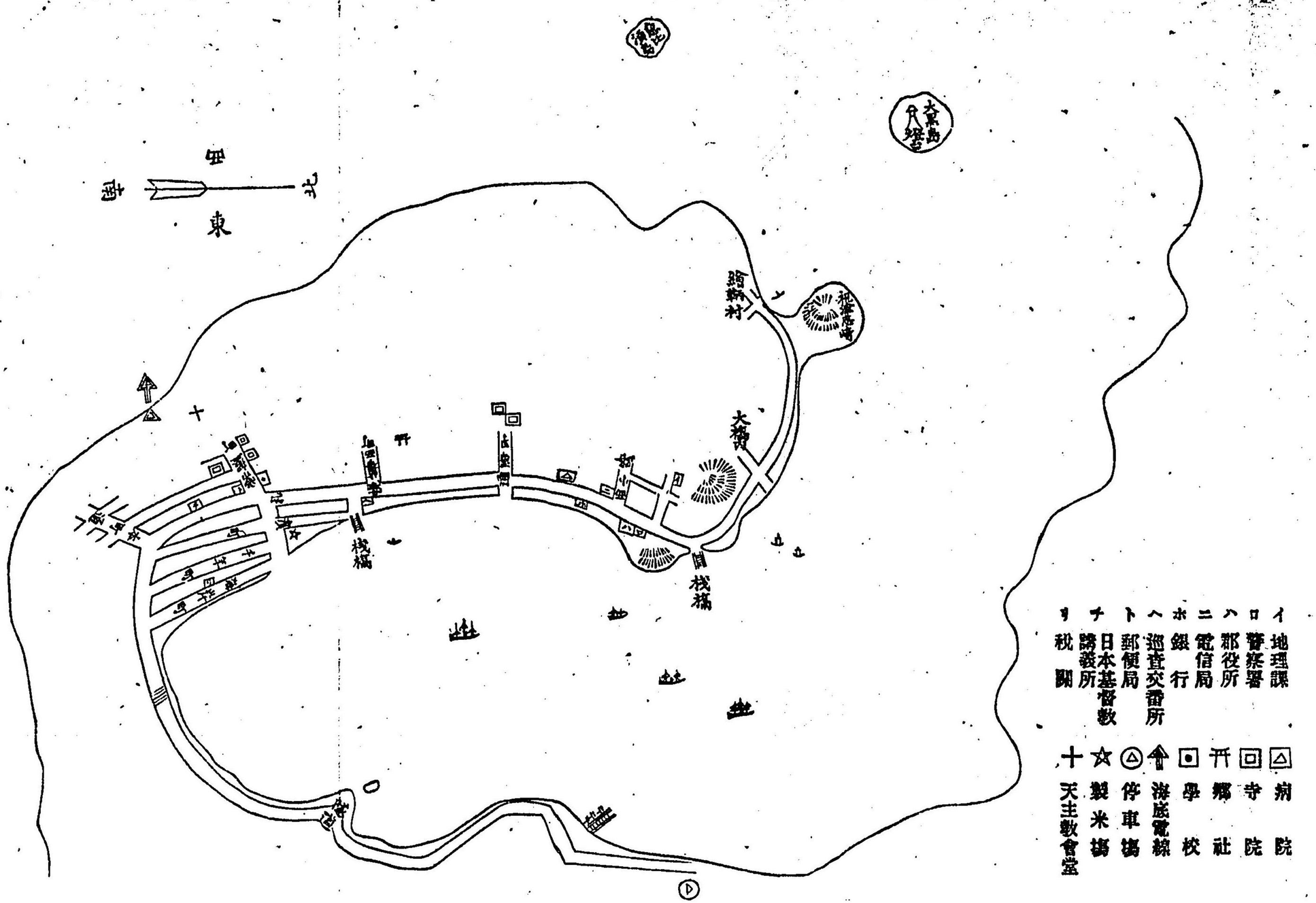
第十二章　寺院　十五丁
第十三章　室蘭鄉社　十六丁
第十四章　小學校　十七丁
第十五章　病院　十七丁
第十六章　停車場　十八丁
第十七章　棧橋　十九丁
第十八章　廻漕店　十九丁
第十九章　旅宿屋　二十丁
第廿章　洗湯屋　廿一丁

第廿一章　貸座敷　廿一丁
第廿二章　料理店　廿二丁
第廿三章　寫眞師　廿二丁
第廿四章　消防組　廿二丁
第廿五章　實業者氏名　廿三丁
第廿六章　人物十五家　廿八丁
第廿七章　產物　廿九丁
第一課　陸產
第二課　海產

第廿八章　諸物價　三十丁
第廿九章　生活の定度　三十一丁
第三十章　教育　三十三丁
第卅一章　政治及宗教　三十四丁
第卅二章　商業　三十六丁
第卅三章　陸海產物收額　三十七丁
第卅四章　室蘭と鐵道　四十一丁
第卅五章　室蘭と內地　四十二丁
第卅六章　室蘭と外國　四十三丁

第卅七章　室蘭と北海道　四十四丁
第卅八章　渡海者の注意　四十五丁
第卅九章　西紋鼈村　五十丁
第四十章　幌別村　五十五丁
第四十一章　鷲別村　五十七丁
第四十二章　輪西村　五十八丁
第四十三章　軍港　五十九丁
第四十四章　商港　五十九丁
第四十五章　鳳巢山　六十丁

第四十六章　イトツケレップ　六十一丁
第四十七章　近郊遊覽所　六十一丁
第四十八章　室蘭の將來　六十三丁
第四十九章　土人（アイヌ）　六十五丁
附錄
第一章　近郊里程　一丁
第二章　海陸距離及賃錢表　二丁
第三章　北海道土地拂下規則　六丁


東
北
西
南
大島
大島
踏鞴村
大橋
桟橋
桟橋
イ 地理課
ロ 警察署
ハ 郡役所
ニ 電信局
ホ 銀行
ヘ 巡査交番所
ト 郵便局
チ 日本基督教講義所
リ 税關
病院
寺院
郷社
學校
海底電線
停車場
製米場
天主教會堂

北海南門之鎖鑰

第一章　總論

第壹課　位置

我室蘭郡ハ膽振國西南端にありて東南は渺茫たる太平洋に面し西北は幌別有珠の兩郡に隣る南北の一對は噴火灣を隔てゝ遙かに渡島の函館に境す、

室蘭港は繪鞆岬の内にあり港灣水深くして船舶の碇泊に便なること世人稱して北海道第一の良港とす、昔嘗て白鳥の群遊せしを以て名つけて白鳥灣と稱す灣

口西に向ひ大黒島の小嶼燈臺を戴ひて其灣口に當る、室蘭は舊名を「トッカリモエ」と呼び荊棘繁茂僅かに土人の數戸を目擊するのみにして若し夫れ前山の夕には幾匹の熊群か食を求めて其處彼處を徘徊したりしも明治五年初めて黒田開拓使新港を此處に開き今の名に改めたり。

第二課　地勢

地勢は西南に高くして東北次第に低下せり此地北海道南部の要路に當り炭鑛鐵道の起點たるを以て貨物の出入旅客の往來頗る頻繁にして函館青森等の諸港

よりは定期航海の汽船を通ずるの便あり殊に本年六月よりは特別輸出港の布達をかされたれば内外の軍艦商船或は貨物を積む爲め或は石炭を運搬する爲め盛に出入するが故に港内常に帆檣林立し車聲笛聲轟然として相和し室蘭の繁昌亦昔日の比に非ざるなり。

第三課　市街

市街は半島の西南端にあり丘陵欝乎として後に聳へ港灣水を湛へて前面を擁す市勢東西に短かくして南北に長し内に郡役所警察署郵便電信局學校病院等あり、

札幌通と稱するい最も繁盛なる市街にして道路幅廣く人家稠密建築壯麗人馬の雜沓往來の頻繁亦宛然都會の趣あり。

第四課　氣候

室蘭は北海道中第一の暖地にして極寒の時と雖も大抵華氏の寒暖計十七八度若しくは十五度以下に降ることと漸く一二度に過ぎず而して其極暑の時に至れば九十度若しくは九十一二度の高きに昇騰することあり之を以て此を考ふれば內地と雖も靑森山形地方に比すれば却つて溫暖なるを覺ゆることあり。

然れども此地は寒冬積雪の多きと四圍の寒冷なるとに依つて春風到るの時至つて遲く大抵四月の上旬より五月の中旬に到らざれば梅花の馥郁たるを嗅ぐことを能はず、

後るれい梅も櫻に劣るらん
先がけてこそ色も香もあれ、

既に此節に到れば桃李櫻杏悉く花を開き紅白濃淡美を競ひ妍を爭ひ一時は宛如として百花園に遊ふが如し而して梨花の淡泊なるに至つては大抵六月上旬の頃なり、

是を以て五月の末六月の初旬迄は矢張り袷二枚に袷羽織にて六月の中旬より七月の初めに入りて漸く單衣に移ることあり已に九月に入れば再ひ冬季の裝にして單衣浴衣を用ゆるの期節い僅かに二ヶ月位に過ぎずされども此間と雖も時々氣候に激變あるが爲めに何時も冬衣を放棄すること能はず。

第五課　人情風俗

津と云ひ港と呼へば人情風俗の好からざるとい既に業に世人の能く知る處なり然れども本港の如きは開港日尚ほ淺きか故に未だ百事成頓せざると共に人情

風俗も亦隨つて質素浮浪者流の入來も至つて少なく誠に欣はしきことなれども近來は次第に文明の風強く人情日に薄く風俗月に亂れ德義亦弛滯するの感なき能はず隨分此間にありて德義を講じ人情を談すべきの寺院僧侶土地の割合に比して少ながらずと雖も是亦風教の頽廢を慨歎して之れが挽回に斡旋するの僧侶なく只管世と共に推移する俗臭紛々たる當世的俗輩の集合にて到底社會改良とか人心改造とかの大勇氣を有する者なく誠に浩歎の至りなり殊に痛歎に堪へざるものは六軒の貸座敷市中に散在して何れも

高閣天を摩し淫聲妖音公然として相和し藝妓娼妓い白中と雖も傲然として大道を濶歩し恬として恥づる所なきが如し人情の浮薄風俗の頽敗推して知るべし、斯る風習なれば適ま九尺二間の裏屋住居をなして細き烟を擧げて日々の生活に忙はしき可憐のデメント（日雇稼）までも祝典祭禮等の日あるに遭へば借金をしてまで絹布の衣裳を造り若しくはフロッコートに卷煙草位を薫らして人知らず大道を横行す豈憐むべけんや。

第二章　戸數及人口

本籍戸數	寄留戸數	合計
六二七、	四九二、	一、二九〇、

本籍人口	寄留人口	合計
二、九〇一、	二、〇一九、	四、九二〇、

第三章　町村名

札幌通　幕西町　西小路町　海岸町　本町
澤町　千年町　濱町　常盤町
輪西村　元室蘭村　繪鞆村　千舞鑑村

第四章　各國移住者統計概表

縣名　人口

新潟縣	四二六、
福岡縣	二三二、
岩手縣	三一二、
青森縣	二〇〇、
鳥取縣	一九〇、
宮城縣	一〇三、
山形縣	六〇、
福井縣	二五〇、
秋田縣	三〇〇
福島縣	八〇

德島縣	一〇〇、

餘は甚だ小數にして數ふるに足らず故に略す。

第五章　郡役所

郡役所は札幌通にあり前は鳳巢山を仰て西小路町に面し後は金波渺々たる港灣に臨む西洋風の建築巍然として二層樓をなし左右の兩傍い梅櫻棕梠樹婆娑として繁生し風色甚だ閑雅なり郡長を千里安吉氏と爲す年齢殆んと五十歳容貌雄偉にして温厚德實の風あり下民に對する親切丁寧市民悅服す氏は福島縣會津の藩士にして明治七年初めて此地に來り爾來官吏と

して歩々着々其職を進め終に今日の榮位に昇れり又以て範を後人に示すに足る。郡書記の名を擧ぐれば左の如し

岡村巖　露崎廣　河内定爾　三浦純一
秋塲全勇　大井幹雄　江刺家吉雄　市島金二

第六章　警察署

室蘭警察署は札幌通にあり郡役所と地を同ふす別に市街の中央に巡査交番所を置く署長を警部諏訪善太郎氏と爲す鹿兒島の人なり赴任日未だ淺きを以て其人となりを審にする能はすす本年よりは特別輸出港の故を以て水上警察を設置せらるゝと云ふ。

第七章　地理課

地理課は市街の西南端なる岡上にあり稱して番外地と云ふ高燥なる地歩脱然として港灣を卑睨し眺望甚だ佳なり課長を柳橋友八郎氏と爲す。

第八章　郵便局

郵便局は札幌通にあり此地四道八達の衝に當り實に其便なること謂ふべからず抑も該局たるや北海全道に往復するの郵便物殆んど悉く送達するの重任を負擔したれば事務員の數も割合に多く繁忙亦謂はん方

なし局長を永井次郎氏と爲す福島縣會津の人なり。

第九章　電信局

電信局も亦札幌通にあり郡役所警察署と粗ぼ相對す地位高燥にして建築壯麗なり局長を村山徹氏と爲す。

第十章　銀行

銀行は札幌通第十七番地にあり是れ日本銀行の支店たり。

第十一章　稅關

稅關は海岸町番外地にあり宏闊たる二層樓雄然として聳ゆ本年六月十五日を以て特別輸出港の公布に就き新たに此處に設置せられたるものなり稅關長を林淨氏と云ふ函館稅關の出張所たり。

第十二章　寺院

土地の狹隘なるに對照し人家の尠少なるに比較し寺院は割合に多し佛閣の數を擧ぐれば則ち安樂寺、証誠寺、滿岡寺、日蓮宗說敎所及び本願寺派出所の五個寺とす。

此外又基督敎の會堂講義所等あり曰く天主敎公會堂、日本基督敎講義所及び聖公會講義所是なり當時天主敎會は佛蘭西人ルーソー氏と稱する常住傳道者を置

けり就中日本基督教講義所と稱するは最も信徒多數にして又勢力も他に抜ずるものあり。

第十三章　室蘭鄉社

鄉社を八幡神社と稱す應神天皇を奉祀せる所たり堂宇甚だ宏濶なりと謂ふを得ざると雖も地位極めて宜しく以て神社を築くに足る其蓊然たる翠色滴らんとして蔭を爲し港灣京街一眸の中にあり毎年八月十五日を以て大祭日と定む此日市中沸くが如く狂踊乱舞至らざるなし實に一年四季の最快日とす宮司を大講義佐藤守雄氏と云ふ。

第十四章　小學校

小學校は常盤町にあり公立常盤小學校と呼ぶ生徒大凡四百人尋常高等の二科より成立し教師六名にて擔當す別に裁縫科を設けらる爲めに一名の女教師あり校長を島貫正次氏と云ふ仙台地方の人にして師範學校卒業生なりと。

第十五章　病院

病院に公立私立の二個あり公立病院は札幌通にあり院長を中村常次郎氏と爲す私立病院は幕西町にあり院長を齋藤專三氏と云ふ氏は至つて人望ある人にて

嘗て公立病院の院長たりし事ありと云ふ當地は別に開業醫等なし。

第十六章　停車場

停車場は室蘭市街を距る一里二十町許りの處「イトツケレップ」にあり此を以て室蘭に宿泊するもの毎朝七時頃より馬車にて此處に趣くなり而して馬車賃一人に就き十五錢とす札幌、小樽に通する炭鑛鐵道たるを以て旅客の昇降頗る頻繁なり今や炭鑛鐵道會社は其不便を感じ遂からず室蘭市内に延長せんと計畫せり然らば則ち室蘭の繁榮亦增々加はる。

第十七章　棧橋

棧橋は三個所にあり一は旅舍㊀蛯子廻漕店の前面にあり一は濱町海岸にあり㊐栗林廻漕店其右傍にあり而して其一は輪西村「イトツケレップ」にあり此れ全く石炭運漕の便利に架設したるものなり。

第十八章　廻漕店

廻漕店を六ヶ所とす曰く金森廻漕店　㊀蛯子廻漕店　田中代理店　㊐栗林廻漕店　石田廻漕店　㊐栗林三作廻漕店

何れも札幌通にあり就中㊐栗林廻漕店及び㊀蛯子廻

潮店い共に郵船會社の取扱にかゝる。

第十九章　旅宿屋

㊀蛯子源吉　㊁小島嘉七　㊂日沼菊造
㊃本多新支店　㊄本多新　㊅小杉房吉
㊆山中勇太郎　㊇中川權造　㊈白勢與兵衛
以上札幌通にあり就中㊀蛯子旅店の如きは内地にも稀なる結構にして旅客の待遇等用意周到せり、而してイトツケレップ停車場外にあるものは則ち
㊉細川喜八　㊋西島万吉　㊌河田幾次郎
等なり。

第二十章　洗湯屋

㊍本多新　㊎阿部わき　㊏八幡藤三郎
㊐坂本八重　㊑加藤房五郎

第廿一章　貸座敷

其戸數と人口に對照して貸座敷の數遙かに超過せり而して其數を問へば即ち六棟今其位置と名稱とを擧ぐれば札幌通にあるもの之を醉喜樓齋藤熊太郎、武藏野祐五郎、介中村茂三郎、◎小杉久兵衛の四とす、幕西町にあるもの之を会近江ひで、新茶屋土門熊吉の二とす何れも七八名の娼婦を有す。

第廿二章　料理店

(光)齋藤光太郎　秋岳樓　秋岡芳逸　豐友亭　加藤房五郎

何れも札幌通にあり結構壯麗にして眺望に富み夏に宜しく亦秋に宜し登客常に絶へず。

第廿三章　寫眞師

寫眞師ハ札幌通街道にあり愛誓堂主人三田地千代吉氏と爲す。

第廿四章　消防組

消防組は屯所を濱町に置く火災を警戒する爲め毎夜十時頃より徹夜金棒を鳴らして市内を巡廻す爲めに

本港の火災誡に稀なり組長を今井佐次郎氏と爲す。

第廿五章　實業者氏名

酒、味噌、醤油、酢、鹽、洋酒、雲丹
日本郵船會社荷物船客取次所
帝國海上保險會社株式代理店
東京火災保險株式會社代理店
明治生命保險株式會社代理店
常盤町廿五番地
醤油、味噌、醸造發賣元　谷朝雄

札幌通八十四番地
清酒濁酒燒酎製造　谷藤覺藏

札幌通五十四番地
米穀荒物酒醤油雲丹　穴澤忠吾

(七)札幌通九十八番地
栗林五朔

札幌通百廿二番地
清酒濁酒製造　津田喜平治

札幌通五十六番地
清酒濁酒燒酎製造　佐々木卯太郎

札幌通百十一番地
米穀、雜穀、荒物類等　(平)栗林吉次

太物 小間物 商 停車場前 ◎ 伊藤繁藏支店

米穀荒物 水産商 停車場前 ⊕ 寺尾孝太郎

靴製造 札幌通百十番地 青木藤三郎

和洋洗濯屋 札幌通 富谷長三郎

藥種商 札幌通八十四番地 秋岡逸次

藥種商 札幌通百〇九番地 ㊣ 奥村支店

水産業 雜貨商 元堂廻 ⊕ 矢幅專太郎

和洋仕立職 札幌通九十四番地 ㊟ 篠崎道也

調刻師 札幌通 前田祐太郎

鍛冶職 札幌通百八番地 日 笈川鶴松

藥種商 札幌通六十七番地 岩成龍夫

時計舗 札幌通誠務堂 ㊟ 石川順平

漁業 元堂廻村 ⊕ 高橋德兵衛

菓子製造 札幌通九十二番地 ⊕ 高杉善藏

菓子製造業 札幌通六十七番地 北ユウ

土木受負業 札幌通八十六番地 澤田清作

魚屋 札幌通七十八番地 ㊁ 沼田常吉

菓子製造 札幌通八十番地 ⊕ 工藤善五郎

滋養饅頭製造 札幌通百二番地 松田精一

米穀搗入粉類製造 濱町 ○○ 三ッ輪精米所 持主 日野愛憲 岩本桑三郎

質屋營業 浩錠町六番地 ㊟ 芳賀勇四郎

荒物貨物商 札幌通五十番地 田 宮幸助

米、鹽、醬油、味噌、吳服類雜品小間物

札幌通八十五番地
最上谷慶次郎

米穀荒物商

札幌通七十七番地
相馬彦一

陶器、下駄、洋酒、味噌、醬油、荒物、雲丹製造

札幌通九十七番地
山崎常吉

荒物商

札幌通八十七番地
今田商廛

蒼鑑、茶、荒物、度量衡賣屋

札幌通六十四番地
最上谷次吉

和洋酒類煙草類横須賀鎮守府御用北海新聞所捌賣

札幌通八十四番地
宮崎邁

吳服太物

札幌通八十五番地
今井支店

雲丹、荒物下駄類商

札幌通廿三番地
岩本永輔

米穀荒物

札幌通九十八番地
石油商
星井善八

米穀商

札幌通百一番地
大矢平作

果物青物紙類雜品

札幌通七十九番地
佐藤藤松

陶器荒物商

札幌通百三番地
永井音治

吳服商

札幌通百一番地
秋田米次郎

荒物仲買商

札幌通四十番地
小島ソノ

和洋紙類洋酒茶煙草下駄類

札幌通八十一番地
河村幸次郎

履物類

札幌通六十一番地
小杉萬次郎

雜穀荒物商

札幌通廿二番地
龜田松太郎

荒物雜穀商

札幌通百三番地
北見福吉

荒物雜穀商

札幌通九十一番地
中西彌之吉

吳服太物雜貨商

札幌通百三十一番地
高田商店

和洋小間物諸雜品類

札幌通七十六番地
加賀谷清藏

古物商

札幌通百番地
千葉勇太郎

太物 小間物 商 停車場前 伊藤繁藏支店

米穀荒物 水産商 停車場前 寺尾孝太郎

靴製造 札幌通百十番地 青木藤三郎

和洋洗濯屋 札幌通 富谷長三郎

藥種商 札幌通八十四番地 秋岡逸次

藥種商 札幌通百〇九番地 奥村支店

水産業 雜貨商 元室蘭 矢幅專太郎

和洋仕立職 札幌通九十四番地 篠崎道也

調刻師 札幌通 前田祐太郎

鍛冶職 札幌通百八番地 笈川鶴松

藥種商 札幌通六十七番地 岩成龍夫

時計舗 札幌通誠務堂 石川順平

漁業 元室蘭村 高橋德兵衛

菓子製造 札幌通九十二番地 高杉善藏

菓子製造業 札幌通六十七番地 北ユウ

土木受負業 札幌通八十六番地 澤田清作

賀屋營業 常盤町六番地 芳賀勇四郎

魚屋 札幌通七十八番地 沼田常吉

菓子製造 札幌通八十番地 工藤善五郎

滋養饅頭製造 札幌通百二番地 松田精一

米穀搗入粉類製造 濱町 三ツ輪精米所 持主 日野愛喜 岩本參三郎

荒物貨物商 札幌通五十番地 宮田幸助

第廿六章　人物十五家

勉強家　日野愛憲　醸造家　谷朝雄
有志家　本多新　漁業家　西澤忠作
教育家　島貫政次　商業家　栗林五郎
德實家　宮崎邁　經濟家　今井藤七
財產家　最上谷慶次郎　俠客　今井佐次郎
冒險家　石田久吉　企業家　岡田省吾
人望家　千里安吉　熱心家　最上谷次吉
土木家　澤田清作
室蘭港總代人名

穴澤忠吾　相馬彦一　小杉久兵衛
永井音治　栗林吉治

第廿七章　產物

第一課　陸產

サビタ樹のパイプ、林檎、馬鈴薯、粟、片栗粉、天然桑麻、天然櫻、山葡萄、地竹、椎茸、欵冬、菜種、石材、材木、炭、竹節人參、

第二課　海產

雲丹、鮭、鱈、鰯、鰈、鯡、章魚、帆立貝、乾海老、昆布、乾海鼠、海苔、裙帶菜、蛤仔、羊邊蛸、海鼠、

第廿八章　諸物價

北海道は諸物品の代價内地に比して割合に高直なり而して室蘭い札幌に比すれは甚た高價にして又小樽函館に比すれは却つて廉價なり然れとも概して北海道は高價なれば今其一例を擧げんに室蘭にして斬髪料一人に付き金拾錢若しくは拾貳錢なり入浴料も亦一度に付金貳錢なり鷄卵一個に付き金貳錢より貳錢五厘宿泊料大概三十五錢より五十錢位なり是を以て衣服飲食從つて高く月給にて生活するもの丶爲めには困難あり然れども獨り木材石炭魚類等の如きものに至つては非常に廉價にして爲めに他國へ輸出することと頗る多しと云ふ。

第廿九章　生活の定度

當港は日用諸物品萬事高價なるか故に其生活を一層すれバ至つて困難なるが如しと雖も其實豐裕なるものあるを見る何となれば諸物品の餘り高價なる爲め多分の金錢を仕用することあれども用ゆることと多ければ收入すること亦從つて夥く出入相適するを以て左程困難者あるを知らず譬令ば婦人勞働して一日稼げば直ちに三十錢若しくは三十五錢の賃錢を得ること

と甚だ困難ならざるを以てなり況んや血氣に富める男子に於てをや是を以て如何なる九尺二間の裏家住居をなせる小民と雖も大低家毎に柱時計を持たざるものなきを見ても知るべし豐裕は懶惰の性を養ひ却つて衣食に溺るの風あり、然れども身を中等社會に列して其實最下等の生活を營みつゝあるものあり其徒多くは一定の職業なく投機的渡海者の類なり彼等は勞働の品位と快樂とを知らざるが故に之を賤しみ、されば乞て別に儲金あるにもあらず僅かに此處、彼處の週旋屋となりて東奔西走

漸く露命を繋ぐに過ぎず誠に不敏と云ふべし。

第三十章　教育

本港にては學校と稱して子弟を教育するの場所は至つて少なく唯常盤小學校一個あるのみ近來耶蘇教の教師等續々入港して傳道の傍ら教育に從事せるものあるを見る教育のこと未だ進歩せりと云ふべからざれとも熱心なる小學教員諸氏の勤勉怠らざるを見れば日を追ふて進歩せることと明かなり殊に近來は市中の心あるもの相謀つて英語研究會等を組織せんと專ら盡力せらるゝものあるを見れば教育の前途亦多望

と云ふべし。

第三十一章　政治及宗教

津と云ひ港と云へば概して政治に冷淡なるは既に世人の能く知れる所なるが我が室蘭は之に反して有志家の數至つて多く從つて政談處々に囂囂たり然れども土地狹隘にして運動を試むる事件なきを以て徒らに他鄉の政治を是非するに止まるのみ若し夫れ全道悉く開け公民撰擧の權を有するの時に至らんか室蘭は必ず良代議士を撰出するの時あるべし。

宗教の事を記せんか戸數と人口に比して土地狹隘な

るに對して寺院殿堂の多きは恐くは室蘭に如くものなかるべし然れども宗教家として社會の良心を健全ならしめ道義風教の頽敗を挽回せんと壯圖を懷抱せるもの頗る稀なり僧侶の或る者の如きは汚行穢狀時としては俗人にも劣るが如き有樣なきにあらずと聞く近來は基督教なる新宗教(實は天地と共にあり)陸續として渡來し種々個人の間に傳道せり然れども日尙淺きが故に未だ顯著なる勢力好果を見ざると雖も其主義を確持し信仰の熱心なる亦賞すべきものあり斯の如き土地にありては兎角宗教の勢力を養成して港

民の德風を改造せざるべからず今日の有樣にては宗教地として先づ劣等の地位に在るものなり歎ずべし。

第三十二章　商業

本港は北海道南門の鎖鑰たれは內地より渡海するもの函館に一泊し若しくは直接に入港す之か爲めに北海全道へ行步を企つるものは勿論諸物貨悉く輸入し來る而して又之れか全道より輸出するもの則ち石炭、穀類、木材、魚類等悉く此地に輻輳して一大仲買の問屋地たれば商業の繁盛旅客の往來實に頻煩なり就中穀類、魚類、酒類、石炭等の商況最も隆なり。

第三十三章　陸海產物收額

養蠶家及繭糸の產額

養蠶家數	蠶卵紙掃立數
一七六、	一八、四一五蛾　二〇、三五枚

成繭・高	繭	玉繭	屑繭	出殼繭	計
三二、五三升石	一六、七五升石	一六、五一升石	四四、一三升石	一〇九、九二升石	

以上は即ち明治廿四年末の統計なり爾來蠶業の進步發達して之れが養蠶に從事するもの誠に夥しく本年

の如きは殆んど全港の五分一に超過するものあるを覺ゆ之れ全く天然桑の數多なるに依る。

農産物收獲及作付反別（廿四年末統計）

種類	作付反別	收獲高	一反歩收獲高
大麥	二四二反	一〇四石 四三〇合	
裸麥	二七	一一 四〇八	
小麥	二一九	八四 三八五	
大豆	七八一	三九七 五〇八	
小豆	一二四	五五四 四四七	
玉蜀黍	二八	二七 九六五	
粟	一九四	一二六 六四九	
蕎麥	四二七	二四八 五八一	
菜種	五	四 八〇〇	
大麻	二七	二八一貫 一〇四、一一	
馬鈴薯	七〇五	三〇九、九三〇 四三九、一七	
合計	二七七九反	一、五五五石 五一七三合	
	三一〇二一一貫	四五〇〇二八	

水産物

品目	産額	代價
鰊粕	一一八石	六八四圓

鹽鮭	二、二二一	二、二二〇	
鹽鯨	八二	三九三	
乾鰕	一八	一六二	
乾粕	一、二二一	九〇七	
煎海鼠	九八	六一五	
乾海扇	一	三八	
昆布	三、二二一	一、一五九	
布海苔	二五	一〇八	
合計	一、〇〇五	六、二八六	
以上は有税品			

品目	産額	代價
鮭筋子	一六石	一一〇圓
合計	一六	一一〇
以上は無税品		
總計	一、〇二一	六、三九六

第卅四章　室蘭と鐵道

室蘭と炭鑛鐵道い離るべくして離るべからざるものあり室蘭港あるが爲めに炭鑛鐵道は布設せられたり室蘭港は炭鑛鐵道布設の爲めに又其繁盛を致せり然らは則ち兩者相待つて初めて其宜しきを得るものな

り社會の配偶固より斯の如し思ふに今日の處にては停車場の位置未だ其宜しきに適はず故に室蘭に及ぼす不便誠に僅少にあらざるなり今や鐵道社員及び室蘭港民大に協議する所あり鐵道を延長して室蘭市街に達せしめんと熟議漸く成つて木月中(七月)港灣埋立に着手すと云ふ又以て室蘭の將來を卜するに足る。

第卅五章　室蘭と內地

內地の北海道に渡來するもの其上陸を二門とす北にありては小樽港南にありては室蘭港二者何れをか擇ばざるべからず而して今其室蘭の航路を述へんか先

づ其夜十二時に青森を解纜し翌日午前五時頃函館港に入り留ること數時間直ちゐ錨を拔て出帆し室蘭港に向つて航す其日午後三時若しくは三時半頃該港に着す一泊して明日の滊車を待ち而して其向路を進むべし之れ實に北海南門の鎖鑰たる所以なり。

第卅六章　室蘭と外國

爾來外國の船舶往々にして寄港するもの軍艦商船少なきに非れども此等は皆石炭を積載するの外更に何の目的もなかりし又能はざりし故を以て外國船の出入至つて少なく室蘭港民の損益毫も預る所なしと雖

も然れども本年六月よりは特別輸出港の許可ありたるが爲め自今外國の船舶公然此港に出入し大に此地の繁榮を增進せしむるならん想ふに米國は世界第一の商業國なり而して我北海道は米國に航するの便至つて宜しく他日一大販賣所たる又疑ふ所にあらず室蘭の將來豈輕々觀過すべけんや。

第卅七章　室蘭と北海道

北海道を開拓せんと欲せば先づ鐵道を蛛網して道路を開通せざるべからず道路を開達して運搬出入の自由便利を與へざるべからず運搬出入の便利備具せば

農民の移住する日を數へて待つべし。

若し夫れ鐵道完設し農民各所に散住し山林を倒伐し荒野を開墾し菜花麥浪天に漲ぎり五穀豐熟して穰々家に滿つるの時に至らんか之れが輸出を內地若しくは外國に試みんと欲するの時は陸路必ず室蘭に運搬し之れか販賣の途を講せざるべからず何となれば自然の地形は實に其至便を有すればなり之れ眞に室蘭は北海道南門の衝港なる所以なり。

第卅八章　渡海者の注意

北海道に渡海するものは大抵初夏若しくは初秋の候

を最佳とす内地よりて百花既に落盡して新綠榮を競はんとするの時當地は未だ百花の婉麗を裝はざる氣候なれバ内地にありて炎天燃ゆるが如き時と雖も當地にありては單衣浴衣にて朝夕は甚だ其寒冷なるを覺ゆ實に避暑の仙境と云ふべし而して初秋に渡來を促す所以のものは寒氣の激甚を慣習せんか爲なり冬季に至れば寒氣著しきのみならず大雪路を沒して歩行自由ならず加之ちぎ寒冒流行して不慮の病に罹ることあれはなり、

斯の如き氣候なれば殊に農業或は開墾の目的を以て

渡海するものは必ず春季の中旬若しくハ下旬には殘雪を犯して渡來せざるべからず何となれば冬春兩季は大概寒國の例として臥て食ふてふ諺のあるが如く何事も家外の仕事に從事すること能はず漁夫なれは網を造るか婦人なれば縫針の業にても勤むるの外何事も爲す能はされは眞に座食するのみ從來移住者往往にして渡海の時期を過まり非常の損失を爲せしもの尠なからず故に前陳の如く新春早く雪を犯して進み其融解するを待ち山に入り木を伐り小屋を造り專ら開墾に從事すべし而じて其希望は明年の糧食は其

所にて收獲する位の目的たらざるべからす若し然らざれば折角の渡來も空しく恨を北極の寒天に漏洩せしむるのみ注意すべきは此點なり

且又此地に渡海するものは初夏と雖も必す冬節の衣類を用意せざるべからす北海道は到る處氣候の激變多きか故に午前に炎天たるも午後に至れバ忽ち變じて寒冷となり午前の浴衣は午後の綿入となること屢屢なり之を以て寒冒に觸るゝもの誠に多し是又注意すべきことなり。

次に吾人内地にありて北海道に關する談話を聞けば

非常に金融通圓滑にして收入すること至つて夥く貧困なるものは北海道に渡海すれば一攫巨万の富を致すかの如く考へらるれども何處も同じ事にて勉め働かされば容易に金滿家になること能はず時としては漁夫等にて一攫千金の業を爲すものなきに非れども之れ又特別の事にて若し夫れ不漁の時あらんか殆んと見るべからざるの困弊に陷ること往々にしてあり故に甘言に乘じて内地より渡海したる小學教員の古物非職巡査の餘り放蕩書生のなぐれ等隨分當地にありて路頭に彷徨せるもの尠なからず、

故に北海道に渡航せんと欲するもの先づ充分の資本を貯へ確然たる目的を有し而して後奮發すべし設令へば農業に從事せんと欲せば直ちに土地の拂下を願ふて忽ち手を下して開墾し商業せんと欲せば宜しく資金を投して此に當るべし決して赤手空拳にて渡來すべき所にあらざるなり之れ最も愼むべき事なり。

第卅九章　西紋鼈村

西紋鼈村ハ室蘭港を距る七里廿九町十七間二尺八寸の所にあり仙臺の舊藩主伊達公の開拓せし所たり地味膏腴にして五穀豐熟近郊第一の地價を有す世に室

蘭小豆の有名なるもの多くは此地に產す林檎藍菜種馬鈴薯等殊に良質とす尙此地に砂糖製造所ありて年年多量の砂糖を製出す社長を田村順允氏と爲す嘗て室蘭郡長たり至つて人望ある人なり室蘭より此地に通ずる街道甚だ崎嶇然れども近年滊船の通行ありて至極便利なり駛航僅に一時間半賃錢ハ三十錢とす今其實業者人名を擧ぐれば

旅人宿營業
船客貨物
取扱所
小野貫一郎
西紋鼈村濱町

日本郵船會社船客荷物取次所
各會社船客海陸貨物取扱所
西紋鼈村網代町
阿部鐵之助

旅人宿營業西紋鼈村濱町
旅人宿營業
船客貨物
取扱所
皆川正吉

旅人宿營業
船客貨物
取扱業

旅人宿　西紋蔵村濱町　丸谷小太郎

諸穀物酒荒物仲買商　西紋蔵村濱町　森石坂善七

米穀荒物臭服小間物藍小賣所　西紋蔵村網代町　大久保定吉郎

米穀荒物商　西紋蔵村　全中村重次郎

米荒穀物　西紋蔵村濱町　太刀川支店

米鹽荒物筆墨紙類　西紋蔵村濱町　青木秀吉

農業旅人宿　西紋蔵村濱町三十六番地　丹野元夫

米荒穀物　西紋蔵村網代町　伊藤與三郎

米穀荒物仲買　西紋蔵村濱町　吉川半平

米荒雜穀物貨　西紋蔵村網代町　太刀川善五郎

鹽味噌荒物煙草紙類　西紋蔵村濱町　小松文造

米荒味噌物　西紋蔵村濱町　齋藤直衛

料理店　西紋蔵村濱町　高橋はる

農業　西紋蔵村網代町　荒川正重

開業醫　西紋蔵村濱町　萱場祐節

乱藥糖製造業　紋蔵糖製糖　株式會社

燐寸軸木製造　西紋蔵村網代町　阿部鐵之助

燐寸軸木製造　長流村字壯營　製造所

製藍產　西紋蔵村末長町　猪狩清右衛門

驛傳所　西紋蔵村濱町　松倉行誠

農具製造業　西紋蔵村網代町九丁目　田代彦左衛門

燐寸軸木製造　西紋蔵村濱町　共同製軸所

材木商物產仲買　長流村字壯營　松浦定吉

米穀荒物製藍賣買水車所有　西紋蔵村末長町　淺見四郎左衛門

米穀荒物 小和洋織物間物類 西紋鼈村綱代町 三上吉太郎

呉服太物 古着 西紋鼈村綱代町 干場彌八郎

一米呉太 穀服物 西紋鼈村綱代町 増岡重平

呉服太物 洋物各種 西紋鼈村濱町 東庄兵衛

廻漕業船客貨物取扱 西紋鼈村五十番地 星廻漕店

甜菜酒製造 洋酒製造 西紋鼈村綱代町 桜本辰次郎

呉服太物 小間物類 西紋鼈村濱町 長谷川吉藏

呉服太物 和洋小間物 筆墨紙 西紋鼈村綱代町 千田商店

呉服太物 洋織物商 西紋鼈村綱代町 藤江鐵男

紋鼈農産物取扱商 西紋鼈村綱代町 鈴木正男

酒造業 西紋鼈村綱代町 山戸金造

洋酒煙草 砂糖紙類 西紋鼈村濱町 飯島伊吉

和洋藥種 西紋鼈村濱町 田中小十郎

鹿爾生絲 寶寶和洋各種織物類 荒物商 西紋鼈村濱町 藤森峰太郎

第四十章　幌別村

幌別村は室蘭を距る四里十六町五間の處にあり人家大凡三百戸人口殆んど一千に垂んとすアイヌ部落のある所なりアイヌ戸數三十六數年前英人バチラ氏愛隣學校を設立し土人を集めて教育を布けり爲めに有珠虻田沙流の地方より寄宿して修學せるものも亦少なからす此地は多く農業地たり其地の重なる實業人名を擧ぐれは

農業　幌別村字チピラカシ　片倉景光

農業　幌別村字チピラカシ　西東勇吾

漁業　幌別町百四番地　久本幸吉

漁業兼旅人宿業　幌別村百十番地　佐藤清左衛門

呉服太物和洋小間物菓子類荒物類　幌別村百十二番地　南彦作

農業兼醸業　幌別村字川上　日野惇

農業兼澱粉製造業　幌別郵便局　日野久橘

農業兼製鹽業　幌別村字東來馬　岡本尹知

漁業兼呉服太物菓物類種々　幌別村百十二番地　藤井時次郎

菓子製造煙草製造業　幌別村百十九番地　井上藤吉

呉服小間物荒物類　幌別村百二十四番地　中山彌重

第四十一章　鷲別村

鷲別村は室蘭を去る二里十六町三十五間の處にあり幌別街道の通路たり戸數大凡四十軒小學校戸長役場等あり之又アイヌ部落のある所にして「シャモ」「シャモ」とはアイヌの我々を指して謂ふ言語なり故に北海道にては一般アイヌに對して我々を「シャモ」と云ふい漸く十七八軒のみ重なる實業人名を擧ぐれば

荒物仲買　鷲別村七番地　上野初太郎

菓子酒類　鷲別村九番地　金子政吉

漁師　鷲別村四十六番地　高橋丑太郎

旅人宿　鷲別村四番地　黑澤精之進

旅人宿 ㊂ 鷺別村三番地 榛澤倉松

第四十二章 輪西村

輪西村と稱するは室蘭の東南二里十四町四十三間の處にあり屯田兵の住居する處戸數大凡二百人口七百有餘今屯田兵藉を擧ぐれば

隊號	兵種	中隊數	小隊數	士官 大尉	士官 中尉	士官 少尉	下士	卒	計
第一大隊 第五中隊	步兵	一	四	一	一	一	三	一九六	二二二

當時隊長を陸軍大尉吉田勇造氏となす鹿兒島の人なり

第四十三章 軍港

本港は軍港の豫定地なれば鎮守府の設置も亦遠からざるなり思ふに北海道の曠野漠々九州四國に二倍するものあり而して本港の如きは全道南部の要港たれば必ず鎮守府の設置なかるべからざるを見る。

第四十四章 商港

內外の關係より地勢の位置よりして室蘭港は商港たらざるべからず鎮守府の設置い吾人港民の喜ふ所なるが目今の處にては寧ろ商港に利益多し本年六月終

に議案となつて國會を通過し特別輸出港と公認せられたり港民の歡喜夫れ如何ぞや。

第四十五章　鳳巢山

鳳巢山は一名測量山と稱す港灣を拔くこと一千尺室蘭第一の名山なり若し夫れ天氣晴朗にして一點雲なきの時に當つて此山に登れば東は噴火灣を隔てゝ遠く陸奥の大間尻矢の兩岬を望み西は有珠虻田の兩郡を一眸の中に集めて後方羊蹄山の白雪皚々芙蓉に類すると有珠岳の烟々たる万丈の火煙を眺む南北の一帶は渡島の諸山蜿々として長蛇の如く人をして蛟龍の海波に浴するものあるを疑はしむ容の類するを以て此稱あり。

第四十六章　イトツケレップ

イトツケレップと稱するは輪西村の一部落なり現時停車場のある所なり戸數大凡五十軒一小市勢を爲す旅店あり商賣あり諸雜誌販賣所あり旅客の流車に昇降する爲め較繁盛なり。

第四十七章　近郊遊覽所

第一祝壽士（シュクジュシ）　祝壽士は室蘭港灣内にあり明治五年函館戰爭の際榎本釜次郎氏の砲臺を築き

し所たりと云ふ今尚其舊跡を存す。

第二ピクリユダ　ピクリユダは室蘭港を距る殆んど四里西紋鹽村街道の地嘗て南部人の陣屋を此處に構へし處杉樹蓊蒼として繁茂し今尚は其廢趾を存す。

第三壯瞥の瀑布　壯瞥瀑布は壯瞥村にあり高さ十數丈瀑の左右は碧岩綠樹並然として秀で風色頗る閑雅なり夏は避暑に宜しく秋は紅葉に妙なり其秀麗實に言語に盡し難し。

第四洞爺湖　洞爺湖は虻田郡虻田村の山中にあり迴圍十三里湖中に迴圍一里の島嶼あり眺望極めて佳あり室蘭を距ること十四里十七町秋春の景殊に佳なり湖畔に北海孤兒院あり林竹太郎氏の創業に係る。

第五登別の温泉　登別の温泉は幌別郡登別村にあり室蘭を距る六里十六町三十五間の處熱湯岩窟より湧沸し流れて浴場に入る著しく諸病に功能あり之を以て浴客常に絶へず。

第四十八章　室蘭の將來

人の知らんと欲するもの夫れ將來より甚しきものは

あらぜ而して殊に我が室蘭の將來はぜ有望にして樂みあるものはあらず何となれば我が室蘭は恰かも小學生徒か漸く初等一年級にありていろはを讀み初めたるの時代に等しく前途の有樣容易に判知し能はざるものあればなり、

試みに思へ北海道の面積六千九百方里沃野平原其間は連なり地味豐饒にもて草木徒らに長じ羆熊空しく戲る若し夫れ鐵道普く蜘網し開墾日を追ふて盛就し全道悉く開拓せられたるの日に至らんか之れか敢產輸出の至便は必ず室蘭に向つて其路を開かざるべか

らず然らば則ち室蘭は一大販賣の市場にして內外の通商貿易港たらざるべからず此に於てか內外の商人或は此處に移住し或は造船所製造所等百般の工業沛然として勃起し北海道に於ける第一の互市場たる期して待つべきなり室蘭の前途亦多望なる哉。

第四十九章　土人（アイヌ）

第一性質　性質は至つて溫順にして又他人に親切なり性甚た酒を嗜み敢て醉狂せず醉へは則ち笑然として踏舞す風姿掬すべし彼は又約束を重んじ決して違約等あることなし好

んて弓矢甲冑等を藏す又性貯蓄に乏しく常て木炭等の備あることなし。

第二容貌　容貌壯嚴にして一見恐るべきの風あり頭髪は自然に放任して更に剪斬せず鬚髯も亦尨々たり何れも身体强壯にして本土人に比すれば遙かに優れり婦人は又男子と等しく頭髪は自然に放任し口の周圍と兩眉の間に黥布し中には兩手身体等にも亦黥布せるものあり多く珠玉を好み常に首環を成せり。

第三言語　言語は一種のアイヌ辯を用ゆ設令へば我々にて上等と云へは彼は「ピリカ」と謂ひ又神と云へば「カモエ」と云ふが如し然れども彼等の多くは我々と同じき普通日本語にて語るが故に毫も差支を生ずることなし。

第四衣服　衣服は多く木皮を以て製したる織物にして之れに種々の模樣を縫ひ附け極めて華麗なるものなり中には間々獸皮を被るものもあり足にも亦之れと等しきものにて常に脚袢を纏へり斯の如く裝飾を愛好するの

人種なるを以て祝日祭典等には昔し封建時代に多く仕用せられたる陣羽織等着用するを常とす。

第五家屋　家屋は至つて粗造なるものなり其構造は丸太數本を結び付けたるのみにて內地の最下等民の古屋と等しきものなり然れども自然の化育い彼等を敎へて冬節雪を防がんが爲めに屋根に段々を附け以て積雪崩落に便にす座敷は唯土間の上に筵を敷きたる儘にて中央に長さ壹間幅三尺許りの圍爐裏

を設け眠るも亦此傍にす。

第六宗敎　宗敎は自然崇拜なり是を以て山川風土禽獸異木悉く崇敬せざるはあし嘗て室蘭にて熊と相撲するものありアイヌ傍にあり頻りに手を合せて熊を拜せり衆人見て以て哄笑すアイヌ平然たり斯の如く彼等は非常に信仰の念厚く敬虔の志に富めり故に飲食の際も必す先づ神に捧げて後にあらざればこれに就くことなし亦以て質朴愛すべきものあり。

第七習慣　彼等の習慣に就て今其一二を記すれば毎年一月大雪を犯して熊の子を取らんが爲めに兩三名の壯丁三々伍々群を爲して深山に入る大抵二三月にして家に歸る取つて家に歸れは之れを保育するに初めの間は乳母の乳汁を以てし少しく成長すれは魚肉を與ふ斯の如くにして漸く二歳に至れば之を屠る之を屠るに當つてや數日以前より近隣の者悉く集まり酒を飲み歌を謠ひ或は其熊に戯れ種々の遊技をなして而して後初めて

首を縊め多人數此上に上り終に往生を遂げさしむるを習慣とす。

又葬儀の節等は先づ近隣の者共其家に來り悉く地に伏して非常に泣咽し用意整ふて出棺に至るや彼等い皆干魚を嚙り乍ら大聲に鳴號しッゝ之に從ひて墓所に行くを常とす而して死人生前の所有品は悉く棺と共に土中に埋葬するのみならず其家宅までも燒き拂ひて他に別に新らしく家を結ぶ設令習慣とは云へ珍らしきことなり。

彼等は又男女の間至つて規律正しく如何なる席にあるとも婦人は決して男子の上に座すること等あるなし故に適ま會食の席と雖も婦人は萬事扣へ目にして饗應品等ハ悉く家に持ち歸り而して後食するを常とす決して淫行猥褻等の所爲あることなし。

第八遊技　遊技ハ種々あり而して男女の間自から異なるものあり男子は遊技至つて粗暴にして例へは胸を打ち手を振り廻はし恰かも徒手体操を見るが如く婦人は之に反して優

美雅訓の處多し余一日紛粉村(アイヌ住所)に遊び酋長の所に至り談偶々遊技の事に及ぶ余問ふて曰く遊技の最上等は如何なる物をか謂ふ彼答へて曰く婦人にては鶴の羽叩(はたき)を擬するこれ最上等ありと余此に於てか悟る男子の粗暴なるは其獸類の性行に習ひ婦女の優美あるは禽鳥の柔かなるに習ふ自然の教育亦恐るべき哉。

北海南門之鎖鑰　終

附錄

第一章　近郊里程

里程

自室蘭至苫小牧村　十六里三十二町五十間

自室蘭至白老　十一里十町五十九間

自室蘭至登別　六里十六町三十五間

自室蘭至幌別　四里七六町三十五間

自室蘭至鷲別　二里十六町三十五間

自室蘭至西紋鼠村　七里廿九町十七間二尺八寸

自室蘭至元室蘭　四里十六町三十八間二尺八寸

自室蘭至虻田村　十二里十一町四十二間

自室蘭至輪西村　二里十四町四十三間

自室蘭至洞爺湖　十四里十七町

第二章　海陸距離及賃錢表

從室蘭至各地	上等賃錢	中等賃錢	下等賃錢
幌別	二七錢	一九錢	一一錢
登別	四四	三一	一八
白老	八五	六〇	三五
苫小牧	一圓二九	九一	五三
追分	二〇四	一圓四四	八四

由仁	二、三八	一、六八	九八
岩見澤	二、八六	二、〇二	一圓、一八
幌向	三、一〇	二、一九	一、二八
江別	三、三〇	二、三三	一、三六
野幌	三、三七	二、三八	一、三九
札幌	三、七四	二、六四	一、五四
琴似	三、八一	二、六九	一、五七
輕川	三、九五	二、七八	一、六三
錢函	四、一二	二、九一	一、七〇
朝里	四、三二	三、〇五	一、七八
住吉	四、四三	三、一二	一、八二
手宮	四、四九	三、一七	一、八五
紅葉山	二、五五	一、八〇	一、〇五

自函館至海里	下等乗客賃錢	自函館至海里	下等乗客賃錢
夕張	二、九六	二、〇九	一、二二
幌内太	三、一〇	二、一九	一、二八
幌内	三、一七	二、二四	一、三一
幾春別	三、二七	二、三一	一、三二
峯延	三、〇六	二、一六	一、二六
美唄	三、二三	二、二八	一、三三
奈井江	三、四四	二、四三	一、四三
砂川	三、六四	二、五七	一、五〇
歌志内	三、九一	二、七八	一、六一
空知太	三、七一	二、六二	一、五二
小樽	三、〇〇圓	伏木	五、五〇圓

室蘭	七七	一、五〇	敦賀	四三九	七、〇〇
釧路	二〇一	二、五〇	境	五二九	八、五〇
厚岸	二三二	三、〇〇	下ノ關	一、一一六	一〇、五〇
浜中	二五二	二、〇〇	長崎	一、二五八	一〇、五〇
根室	二五九	四、〇〇	吉岡	三〇	三〇
青森	五九	一、〇〇	福山	四二	四二
荻ノ濱	二六六	二、〇〇	江差	八二	八二
横濱	二五九	四、〇〇	壽都	一、五八	一、五八
四日市	七二九	五、〇〇	岩内	一七〇	一、七〇
神戸	八七六	六、五〇	余市	一、九二	一、九二
土崎	一四四	三、〇〇	幌泉	一、二一	一、二一
酒田	一八八	三、五〇	浦河	一〇一	一〇一
新潟	二四七	四、五〇	大津	一七二	一、七二

第三章　北海道土地拂下規則

第一條　北海道官有未開の土地は本規則に依り北海道廳に於て之を拂下くべし

第二條　土地拂下の面積は一人十萬坪を限りとす

但し盛大の事業にして此制限外の地を要し其目的確實なりと認むるものあるときハ特に其拂下を爲すことあるべし

第三條　土地の拂下を請はんとするものは其書面に地名坪數並事業の目的着手の順序成功の程度を詳悉し先づ其土地の貸下を北海道長に願出べし

但し耕宅地に爲さんとするものは其坪數を毎年に配當し其成功期限を詳記すべし

北海道廳に於て其方法確實なりと認むるときは其土地を貸下くべし但し借地料を徴收せず

第四條　貸下期限は十年以内とす土地の景況と事業の難易とに依り之を定む但し牧場ハ貸下年期の滿期に際し更に貸下延期を必要とするときハ其願に依て之を許可することあるべし

第五條　耕宅地は毎年其配當坪數の成功を點檢し又海產乾場及牧場ハ隨時其事業の現況を點檢すべし

第六條　耕宅地は其年配當の事業成らさるときは其成功したる土地を除き其他は返納せしめ海產乾場及牧場は第三條願出書の如く成らさるときは悉皆之を返納せしむべし

天災地變其他避くべからざる事故ありて成功せざるときは北海道廳に願出で其指揮を請ふへし

第七條　貸下地を返納せしめたるときは其地內の樹木にして既に伐採したるものは相當の樹木代價を納めしむへし

第八條　貸下地は公益の爲め必要あるときは其期限

中と雖も之を返納せしむることあるへし但し此場合に於ては其事業の爲め既に費したる費用い之を辨償するものとす

第九條　貸下地は他人に讓り渡すことを得ず若し不得已事故ありて讓渡さんとするときは讓渡人讓受人連署の上北海道廳に願出で其指揮を請ふへし但し讓受たる土地の貸下期限は更に之を定むることあるへし

第十條　素地代價は千坪に付金一圓とし成功の後拂下くへし但し其土地は拂下の翌年より二十ヶ年の

後にあらざれば地租及び地方税を課せず（明治十九年六月閣令第十九號）

附錄終

明治廿七年八月十二日印刷
明治廿七年八月[redacted]發行

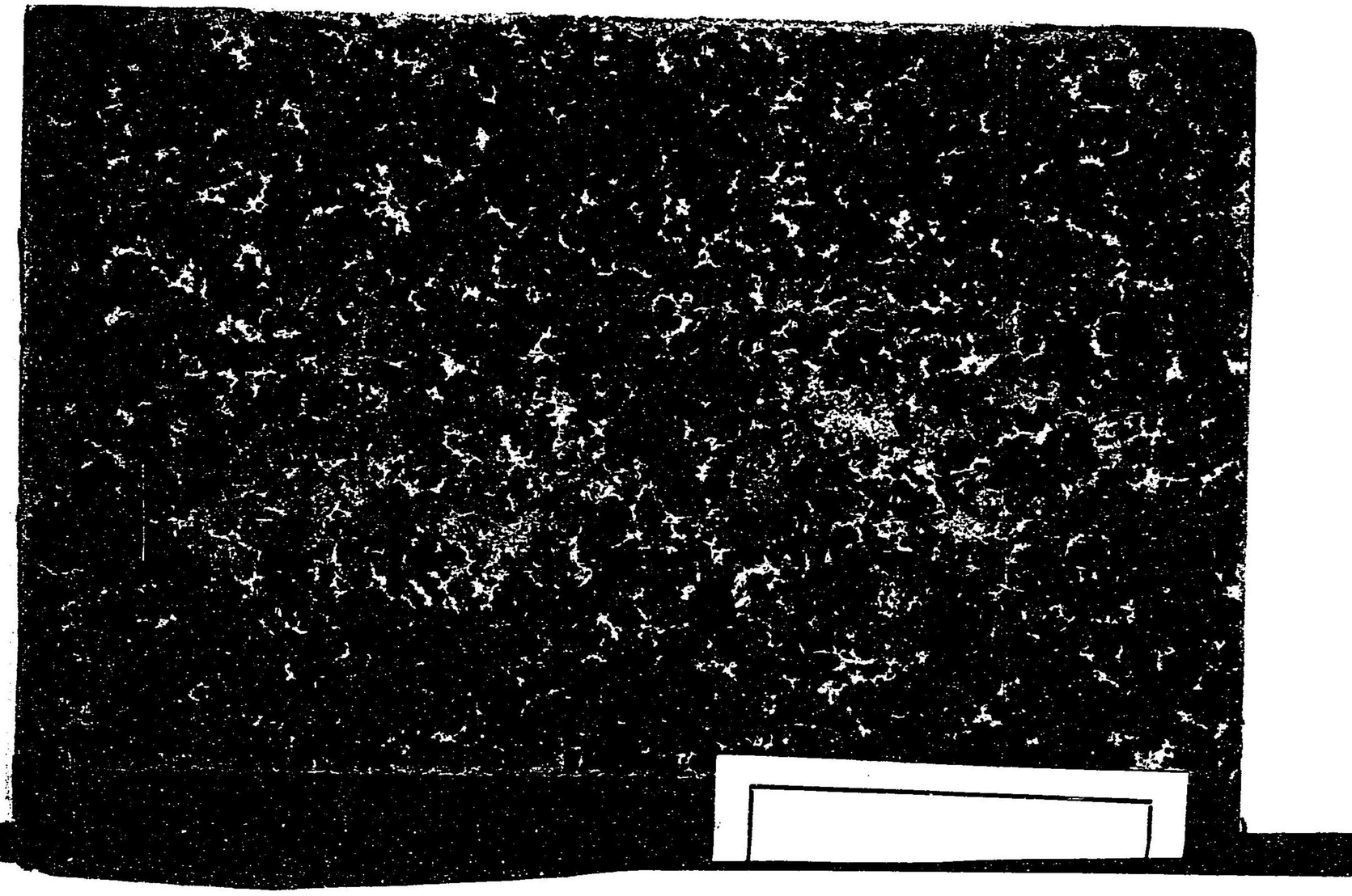
著述兼出版人　北海道膽振國室蘭港五十二番地寄留　綱島儀太郎

發賣元　北海道膽振國室蘭港六十四番地　抱山堂書店

印刷者　東京市京橋區築地二丁目十七番地　曲田成

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

定價金拾貳錢

賣捌所
函館　魁文舍　東京　東京堂　江差　二八堂
仝　重陽堂　仝　上田屋　小樽　白鳥書店
札幌　聚文堂　札幌　自治堂

71
252